

白金蔭

5月号



平成29年5月発行

第75号

六月十六日（金）〃

第四 兼題..翡翠、黒鯛

六月十七日（土）木下駅^{10:30} 水郷めぐり吟行句会

七月二十一日（金）〃 第三 兼題..森林浴、青林檎

八月は休み

兼題句参考句（六月十六日分

翡翠かわせみ、黒鯛ちぬ）

水の木や翡翠に日の通りゆく

翡翠の一閃谷の奢りとす

翡翠や一直線のわが青春

川蝉の川も女もすでに亡し

はつきりと翡翠色にとびにけり

子の声と翡翠のゆくへ澱みなし

翡翠が掠めし水のみだれのみ

翡翠に杭置去りにされにけり

ちぬ釣に虹立つ涛のしづまりぬ

海幸の祠に小さき黒鯛供へ

目に黒鯛の海のおもてとなりにけり

黒鯛の途中火炎太鼓かな

ちぬ釣りの月光竿を伝ひ来る

街闊か店頭に箱壳の黒鯛

黒鯛くるか角建網の尖搖れば

麦秋やうかうか父の倍も生き

下町や銭湯減りぬ燕も

牡丹や風出てかぜのなき如し

雛団栗^{コクリコ}やこゑのかぎりを迷猫

デパ地下に新茶の香人むる

増田陽一

雛団栗の血の色褪せてゆくばかり

美少女の提琴何故か蟠蠶めく

老嬢の昼とは言えど新茶かな

夜盜蛾の昼は隠れて海の音

夏近しサラダのもやし立ちあがる

能村登四郎

岡井省一

山本敏偉

米沢吾亦紅

飯島晴子

加藤秋邨

光成高志

雛団栗の斯くしをらしき珠蓄

パソコンを閉じて一服新茶汲む

すかんぽの赤穂立つ土手夕日差す

放置田に呆け茅花の風遊び

青隙田原ニユータウンまで薄緑

放たれて犬嗅ぎ回る苜蓿

茶漬とて新茶の香愉しめり

ひなげしの青虫乗せて吹かれをり

新茶買ふ東山三条商店街

愛鳥週間巣燕調査員に遭ふ

松村幸一

ツルゲエネフ読みき毎日野茨ぢり

くちなわの通せんぽうに出合はしぬ

新茶古茶知らぬ戦争ありにけり

傘雨忌の蚊の散る文字の色紙かな

兵の日があり罿粟坊主青坊主

ひなげしや今もそのまま子供部屋

光 みち

ローカル線右も左も麦の秋

新茶くむただそれだけが楽しくて

柏餅母と娘の姦しく

武者飾り眠る赤子は四代目

朝曇ミントの香る歯科医院

モノクロのイタリヤ映画雲の峯

黒揚羽淨土淨土へ木橋飛ぶ

練供養三句

化粧する稚児の口もと薄暑かな

二十五の菩薩は氏子若葉風

倉田紀子

浅野正美

母とゐて新茶味はひ庭眺む

白磁碗急須選んで新茶汲む

花ボピー風にゆれみな踊りだす

雛罿粟のこんなとこにも咲き乱る

新茶淹れ遺影に話す孫の事

磯目健二

清和かなユリの木のある美術館

田宮敦子

沼の柳青深まりて茶摘みかな
有明の湧き水汲んで走りの茶

青空へ頭揃える虞美人草

犀川や茶茎の旨き宿なりき

お辞儀してやがて咲き出すポピーかな

青木啓泰

かすかなる香り良しとす新茶かな

新茶には思いの香り無かりけり

一反歩一枚田より月昇る

水鏡飛行機がゆく鮫のように
遠雷やお稲荷さんは知らんぶり

仲本興正

ひなげしや子規の生誕百五十年
正岡子規は慶応三年（一八六七）に生まれたから今
年（二〇一七）は生誕百五十年になる。その一生のや
るせなさをいつも思う。啄木といい、一葉といい、そ
の夭折を悼まずにはおれない。今年の一月号にて長谷
川櫂の新しい子規像を描く時という文芸批評「お辞儀

興正

光成高志

日中は猫と遊べり小判草
街路灯ジャスマンの花巻きつけり
ひなげしのだんだん増える空地かな
腹見せて逆さまになる家守かな
新茶飲み米寿の人と囲碁を打つ

かすかなる香り良しとす新茶かな

新茶には思いの香り無かりけり

一反歩一枚田より月昇る

水鏡飛行機がゆく鮫のように
遠雷やお稲荷さんは知らんぶり

子の嫁の実家へ送る新茶かな
カステラの到来物と新茶かな
ひなげしや子規の生誕百五十年
薰風のスープケースの擦過音

規を思うのである。単に可哀想であつたという俗な心に支配されはいけないと。新しい子規を考えよ。

黒揚羽淨土淨土へ木橋飛ぶ

紀子

先の九品仏の練供養の三句の内の一句である。敬司さんの句報に「黒揚羽渡りの橋を横切れり」(半寿)がある。私は見なかつたが、黒揚羽が淨土へと練る二十五菩薩の頭上を飛んで行つたのである。黒揚羽娑婆ゆ淨土へ練供養とすれば独立した句となるが、沢山の黒揚羽が淨土へ淨土へと恰も佐渡へ佐渡へと草木が靡く如く飛んで行つてゐるのでしょうか。黒揚羽は死者の靈を暗喩してゐるのだから、言葉で強調しなくとも客観描写をしてあれば十分作者の心は読みとれます。

ローカル線右も左も麦の秋

多美子

我孫子市近辺では対岸の利根町に麦畑が連なつていてよく見に行つていたが、最近は無くなつた。流子さんを福井に訪ねた時、三国への往復に芦原線に乗つたら掲句そのものの景色を見てうれしくなつた覚えがある。麦秋は郷愁を誘う景観であるので、生活感と結びつける句もあるが、このように写生句の醸す雰囲気を味わうのもいいものだ。

雛罌粟コクリコやこゑのかぎりを迷猫

孝三

迷い猫が声を限りに啼くのは猫恋の猫であつて春の季語だ。とするとこれは最近若くして亡くなつた松智智

洋を悼んでの迷猫ではないか。何故と云うに、代表作が『迷い猫オーバーラン!』であるからだ。それでは雛罌粟に仏語のコクリコというルビを打つてこう読ませる句意は如何に。先月の陽一さんの一月兼題を早出しされた昭七さんの雛罌粟の句の鑑賞文にある与謝野晶子の歌を想像させ、雛罌粟の妖しい儂げな風情にライトノベル作家の夭折を衝撃させて悼んでいる句意とつた。現代の談林風俳句ともいうべき難解俳句。的外れの鑑賞かも知れませんがそれも俳句の奥深さです。

一句鑑賞

磯目健一

カステラの到来物と新茶かな

興正

貴い物を意味する到来物という古風な表現から日々の居常が偲ばれる。現代風のスイーツにドリンクに対して老舗のカステラと香り高い新茶という取り合わせは古風な月並み定番だが、生活の風格が感じられるから不思議だ。これぞ古風で月並みな取り合せがもつ逆説的な不易流行のあらわれかも。

新茶飲み米寿の人と囲碁を打つ

敦子

落語の「笠碁」は同じ年配で実力伯仲の老人同士が演じる笑劇だが、本句の場合は碁を愛する老人の相手を務めるのは敬老精神厚い年下の上級者であろう。招かれて訪問し、座敷で長年愛用の碁盤を前に相対する。

米寿の背はびんとしている。家人が淹れてくれた旨い

新茶を飲み、和やかに対局が進む。置き石という手合い割りでどんな相手とも楽しめるのが囲碁。二人の心の通い路が目に浮かぶ句である。

ひなげしの青虫のせて吹かれをり

みち

己が身を食う毒虫とも知らず花冠に青虫をのせて微風のなか無心に咲いている雛罌粟。ハーディの小説「テス」のようにあわや好色家の餌食にならんとする純真な乙女を連想するのも可能だが、本来青春とはさまざまな青虫を背負つて生きるものなのかも知れないのだ。写生句だが、青春や人生を暗喩する句としても心に残る。

美少女の提琴何故か蛤蠣めく

陽一

作者によれば弾くのは諏訪内晶子。世界三大ストラディバリウスの一つを貸与されている美貌の天才演奏家。世界を制覇して鮮烈なデビューを飾つた天女のよう十八歳は、その後現代有数の演奏家として大成したが、人生行路は恋に離婚に多難だった。バイオリンが彼女に生々しくとりつく触角軟体動物のように見えたというのである。美女と野獣を思わせる暗喩とともに、バイオリンが実人生で彼女にもたらしたものと象徴するようで面白い。

新茶古茶知らぬ戦争ありにけり

幸一

茶の味を吟味堪能する年配に達する前に、また異性を知ることもなく戦地へ送られた若者たち。いつぱう銃後の故国も新茶の季節到来どころか生きるか死ぬかの窮乏と戦災で喘いでいた。当時の若者が今は老いて戦争体験を遠く追想しつつ新茶を飲んでいるのである。

花ボピー風にゆれみな踊りだす

正美

上五の「花ボピー」が愛称めいて微笑ましい。群生する可憐な花が爽やかな風に吹かれて一斉に揺れながら群舞するようだ。花の躍動とそれに向けられた優しい目がぴったり同調して生まれた句。

雛罌粟のこんなどこにも咲き乱る

敦子

ひなげしのだんだん増える空地かな

正美

どちらも可憐な風姿に似合わぬ強靭な繁殖力で拡がる雛罌粟を捉えた句だが、私が選んだのは下の句だった。理由は上の句の上五が四音で字足らずだったことと、仮名書きのほうが魅力的に思えたこと。披講で「雛罌粟の」と五音に修正することになり、両句を探ることにした。しいて好みをいえばやはり下の句か。

老懶の昼とは言へど新茶かな

陽一

することも無い物憂い昼時に、ふと思いついて淹れた新茶の豊かな香味に心が動かされ会心の笑みがこぼれる。老殘の身のアンニユイのなか訪れた束の間の安

らぎと慰め。

夜盗蛾の昼は隠れて海の音

陽一

沖合い遠く海鳴りが聞こえてくる、見たところすべて事もなく平穏な海辺の野菜畑だが、収穫を無残に食い荒らす獰猛な夜行性害虫が日中は根元に身を潜めて夜をじっと待っている。平和な風景の裏に潜む悪と春昼の長閑な海潮音の取り合せが俳味を生んでいる。

兵の日がありし罌粟坊主青坊主

幸一

戦時下の銃後で罌粟や大麻は実を食用にするため栽培され、わりと身近な植物だった。幸か不幸か無知で麻薬原料になる青い罌粟坊主の分泌液は未熟の意味以外の何物でも無かつた。その罌粟坊主のような未熟の年齢でしかない若者たちが戦争へ狩り出されて行つた。応召兵の頭もまた刈り上げの青坊主だった。遠き日の追憶の句。

一句鑑賞

光 みち

お辞儀してやがて咲き出すボピーかな

健一

雛罌粟の斯くしをらしき珠蕾

高志

この二句とも同じ景である。雛罌粟の茎はろくろ首

のようなく伸びしかも細い。蕾の時はまさに珠状ですべて下向きに垂れていて、お辞儀しているが、開花寸前に立ちあがり上向きに誇らしげに咲く。茎は自由

自在である。お辞儀もしをらしさも擬人化の表現であるが、雛罌粟の印象に適している。作者一人とも対象物に対面して童心にかえり、無心になつている姿が想像できる。対面できない季語もあるうが、対面して作句する努力は大切と思う。吟行はそのためですね。

九品仏淨眞寺練供養吟行句会（5／5 緑が丘文化会館

光成高志

菩薩皆黃金色なり練供養
附け人が菩薩に話す練供養

菩薩さま笙笛持つも無音なり
大泣きの稚児が渡れり練供養
ご朱印を貰ふに往生練供養

拾ひ得し散華大事や練供養

等々力の瀬音の早む夏は来ぬ
練供養稚児に重たや大団扇
泣いて曳かるるお稚児も居るよ練供養

松村幸一

土墨より淨土合掌練供養
練供養位牌を胸に橋渡る
風神雷神青葉若葉を前うしろ

佐藤宏之助

松花粉浴びつつ仰ぐ練供養

鍊供養足を引きずり橋渡る
確と杖突きて橋越す鍊供養

浄土へは三十六間来迎会

黒揚羽渡りの橋を横切れり
楸邨の墓は小さし風薰る
練供養中将姫に飴貰ふ

来迎会歩み危ふき菩薩ゐて

よちよちの稚児も渡るや鍊供養

夏来る稚児行列の化粧顔

白毫つけ稚児の行道新樹光

散華受くための千の手鍊供養

天童の袴紫諸葛采

林半寿

三回橋御僧渡り夏に入る
風薰る二十五人の菩薩さま
鍊供養にはか信者も涙せり

田宮敦子

光みち

睨み立つ阿吽の仁王若楓
大銀杏鍊供養の九品仏
各駅停車人の流れに諸葛采
風神雷神山門抜ける若葉風
小坊主が大きな団扇鍊供養

中山恵子

木下闇奪衣婆の前歯欠けゐたり
樹に寄れば緑の匂ひ陽の匂ひ
梵鐘の撞かれてお鍊り始まれり
風光る泣く子もゐたり稚児行列
初夏や散華取り合ふ衆生ども

釜田敬司

緑さすお面かぶりの九品仏
初夏の風に散華のひらひらと
万緑や二十五菩薩來迎す
鍊供養ひとり泣き出す稚児もゐて
この世よりあの世への橋鍊供養

加倉井たけこ

谷田貝順子

奪衣婆の片膝立てる立夏かな
練供養散華ひとつひら拾ひけり
若楓二十五菩薩來迎会
練供養稚児はぢらひて橋渡る
新緑の満つる境内句帳かな

淨真寺は淨土宗の寺であるがもとは世田谷吉良氏系

〈吟行記〉

散華する稚児の心や御仏様
散華求む善男善女青葉風

の奥沢城の址で「土壘より浄土合掌練供養（宏之助）」、5月5日に行われる練供養は東京都の無形民俗文化財に指定されている。これまで三年置きの8月16日に行われてきたが、酷暑を避けるため今年は5月に行わることとなった。そのためか、これまでより人出が多く、九品仏駅から参道の入口まではフリー・マーケットも開かれ賑わっていた。参道の入り口には「禁銃獵警視庁」の石柱があり背面に明治32年と刻まれていて獵が行われていた事を示している。境内は都内とは思えない程緑が多く銀杏や榧の大木がある。「大銀杏練供養の九品仏（敦子）」総門を入れると左側に閻魔堂があり、練供養のあとで参詣した。「奪衣婆の片膝立てる立夏かな（たけこ）」、「木下闇奪衣婆の前歯欠けぬたり（惠子）」また淨真寺は加藤楸邨、知世子夫妻の墓所でもあり、早く着かれた方は参詣している。「楸邨の墓は小さし風薰る（半寿）」九品仏の名は九体の阿弥陀如来像が祀られている事に由来するが、同じ九品仏を祀る京都の淨瑠璃寺のように一堂ではなく、上品堂、中品堂、下品堂に三体ずつ祀られている。練供養は本堂を娑婆、三仏堂（上品堂）を浄土に見立てて、その三十六間に特別の架け橋を作りそこを二十五菩薩が練り歩く。

「浄土へは三十六間來迎会（半寿）」信者、見物人は開始まで橋の両側に集まっているが、「黒揚羽渡りの橋を

横切れり（半寿）」のような光景も。「梵鐘の撞かれてお練り始まれり（恵子）」一回目は人が亡くなつた時の樂人を先頭に阿弥陀様があの世から迎えに来る「来迎」。「菩薩さま笙笛持つも無音なり（高志）」。二回目は亡くなつた人があの世に行く「往生」、この時は万灯を先頭に住職や厨子が運ばれ、菩薩や導師を守る稚児なども行列に加わります。万灯の花弁や僧侶のまく散華を拾う人達で騒然となります。「散華受くための千の手鍊供養（みち）」泣いて曳かるる稚児も居るよ鍊供養（幸一）」三回目は「還相」極楽より現世に戻り、人のために尽くす。「鍊供養位牌を胸に橋渡る（宏之助）」ここで鍊供養は終了。「鍊供養にはか信者も涙せり（順子）」三年に一度の珍しい行事を堪能することが出来た。句会の高点句は次のとおり。

- | | | |
|----|--------------|----|
| 5点 | 鍊供養にはか信者も涙せり | 順子 |
| 4点 | 浄土へは三十六間來迎会 | 半寿 |
| 4点 | 付け人が菩薩に話す鍊供養 | 高志 |
| 4点 | 鍊供養中将姫に飴貰ふ | |

（釜田記）

俳窓評論纂

* 5月1日の俳句時評に「震源としての俳句」の題にて恩田侑布子の中村草田男にかこつけての自論が載つ

た。妻抱かな春昼の砂利踏みて帰る父となりしか蜥蜴とともに立ち止るの二句を取り上げて季語の裏側にある世界を書いている。著者は草田男の無季俳句排除を「畸形の文学」として排除したのを駁論している。これは季題に現実と内面の投影という「二重性の世界」を求め、「象徴文学」俳句の心臓としたからである。だが、俳諧とは昔から畸形を尊ぶものではなかつたか。さらに被爆し被曝した日本は、すこやかな四季が巡る季題の樂土から追放された生をも自らに引き受けてゆくのではないか。現在の俳句は芸能芸事化が進み、俳壇は「石田郷子ライン」と呼ばれる「新軽み派」が大勢を占める。ニーチェと芭蕉を血肉化した草田男の濃厚で炎々たる俳句と俳論は豊穣な論争を開け、現代俳句を拓いた。今も草田男は俳句とは何かを問う震源に存在する。その到達点から議論を巻き起こしたい。以上が著者の文章である。被爆被曝は原発事故で放射能を受け、今もそれにさらされているということを厳密に表現する言葉である。それはさておき、手持ちの中村草田男の「俳句入門」(一〇〇二)を改めて読んでみた。その時は読み過ごしてしまつたが、今読むと大変重要なことが書いてある。すなわち、子規が芭蕉尊拝の悪弊をさっぱり洗い流してしまって、事実をありのまま写す方向へ俳句を導いたの

は良かったものの、二重性の世界である俳句なのに、第二の世界をとりさつてしまつて「第一の世界」だけにしてしまつた。これがいたましい手落ちであつた。子規は宗匠俳句を排斥する勢いあまつてうつかり芭蕉をも極度に排斥してしまつたのがいたましい。写生の世界に作者の心を封じ込め結晶させ、つまり季語を主體とした俳句が心の奥處の代言であるという域まで到達する間がなかつたのだ。天才はいつでも短命であるのがいたましいのだ。子規は芭蕉を皮相に觀念的に過ぎるとして、これに代わる蕪村をかかげて写生俳句のお手本としたのがいけなかつた。蕪村は画家であつたから、いかにも一幅の絵画をみるように表現されて具體的であつたので写生の実践者と思い込んでしまつた。蕪村の作品をよく読むとわかることだが、内外の古典によつて得られた教養と知識のなかからおもむきのある材料をとつてきて夢のような空想的な世界を絵画にも俳句にも作り上げる人であつた。従つて写生をして「第一の世界」つまり具体的な現実をありのままゆがめないで眺めてゆけと説きつつも、他方で蕪村のように教養からくる趣味的な空想的な句を作れと説いているわけで矛盾している次第です。その後の作者がこの写生と蕪村という子規の説く矛盾になやまされそこから脱出しようとせざにはいられなかつただろうと思わ

れます。新傾向の俳句や自由律俳句はそこから起つて来たのでしよう。この反動が虚子の客觀写生となつたのでしよう。以上は草田男の書いたものの要点である。ほんとかなと思い、以前紹介した（「瀬祭書屋俳話・芭蕉雜談」正岡子規著岩波文庫二〇一六）を読んでみた。復本一郎氏が解説しているように、子規は決して芭蕉を批判しているのではなく、自ら見識も無き、批評眼も無き、自己の標準なきを以て単に古人の所説ににする当時の俗宗匠輩を意識しての過激な発言であつた。発句は文学なり、連俳は文学に非ず、という言も然りである。芭蕉の句を一々評して「滑稽と諧謔とを以て生命としたる俳諧の世界に生まれて、周囲の群動に制御、瞞着せられず、能く文学上の活眼を開き、一家の新機軸を出し、此等老健雄邁の俳句をものして、嶄然頭角を現はせし芭蕉は、實に文学上の破天荒と謂べし」と芭蕉心醉に間然とするところがない。芭蕉以後の其角、去來、嵐雪、丈草、許六、支考、凡兆、正秀、乙州、李由如何、白雄、蓼太、蕪村、暁台、闌更如何。彼らの壯は芭蕉の壯に及ばず、彼らの大は芭蕉の大に及ばざりき。文政以後蒼虬、梅室、鳳朗の如きは群蛙と云つてゐる。「吁嘻ああ芭蕉以前に芭蕉無く、芭蕉以後復また芭蕉無きなり」と結んでゐる。彼らは俳諧的名聞と權勢を得た宗匠であつたが、それだけの作家と見

*子規生誕一五〇年の今年は南方熊楠の生誕一五〇年でもある。朝日に荒俣宏の書評欄にかこつけての短い紹介が載つた。和歌山県田辺市に顯彰館があり、熊楠学の新研究が盛り上がつてゐる。陽一さんの故郷の偉人であり、昨年実弟の方から陽一さんは熊楠のような偉い人になると期待されたと私に話されたのをきつかけに少し興味を持つた。子規と同い年なのだ。田辺市を仕事で訪れた時、ナショナルトラストに登録申請をしているという岩礁地帯を歩いた。自然保護運動の先駆者である。植物学者でもあり、明治の終わり頃の神社合祀令に反対運動をした時、布佐に住んだことのある柳田国男の協力を仰いだ。桁外れの人物であり、自身の論文集や著作集をださないけれども、蔵に收めきれない程の草稿や書簡類を大切に保存してあつた。これが記念館や顕彰館の設立につながつた。仏文學者・平野威馬雄の「大博物学者 南方熊楠の生涯」が日本に途方もない知の妖怪が実在したことを知らせた。妖怪漫画家の水木しげるは「猫楠 南方熊楠の生涯」で生活ぶりを猫の目から書いた。人類學者中沢新一の「南方マンダラ」でその超現代性が説かれる。今全集は品

切れだが、「南方熊楠英文論考」（ネイチャーブー編）が一

番論旨わかりやすいとか。民俗学や植物学の優れた研

究者をたたえる南方熊楠賞は27回を数える。今年は京

大の先生が受賞したとか。我々人間は虫や鳥や菌などと共に生きていかなければならない。ごく当然の常識なのだ。ダムは仕方がないとしても、今まで湾や海を埋め立てて自然を壊してきたことをそろそろ反省していいのでは。土木屋さんが川岸をコンクリートで固めて葦原を駄目にしてきたのを最近は反省しているらしいが、他にもこういう自然との共生を守らねばならない事例はたくさんありそうだ。沖縄なんかよくよく考えてもらいたいものだ。熊楠さんが長生きしていたら怒られると思う。ついつい余計な方に頭が走っちゃって脱線しました。

受贈誌（H 29年5月号）

木々芽吹く中国山地十重二十重（134号） 平野ひろし
お迎えはいつ来てもよしさくら咲く（リ） リ
初燕峠八つを越え来れば（リ） リ
空砲の轟く裾野蟻走る（東京ク5月） 武子 璃子
一木の朴に咲くあり散華あり（リ） リ
石清水胎蔵界の洞に聞く（リ） リ
三千の躊躇に讃辞奉る 万世遊 璃子

駒繫数珠掛桜共に咲く

賢治童話 谷

武者昭七

谷は大地の裂け目であり、へりである。「谷」はそんな底知れぬ大地のへりに引き出されてしまった少年の回想談である。後年の語り手は次のようにいう。「檜渡のとこの崖は真っ赤でした。それにひどく深くて急でしたからぞいでみると全くくるくるするのでした。谷底には水もなんにもなくてただ青い梢と白樺などの幹が短く見えるだけでした。向う側もやっぱりこっち側と同じようでその毒々しく赤い崖には横に五本の灰いろの太い線が入っていました。ぎざぎざになつて赤い土からはみ出していたのです。それは昔山の方から流れで走つてきて又火山灰にうずもれた五層の古い溶岩流だったのです。崖のこっち側と向こう側と昔は続いていたのでしようがいつの時代にか裂けるか割れるとかしたのでしよう。霧のある時は谷の底はまつ白なんにも見えませんでした。」

きわめて筋道の立った説明だけれど少年の目にはそれは底しづれぬ大地の裂け目であり、向う側は得体のしれぬ精靈たちの住み家であり落ち込めば二度と戻れぬ死の谷であった。少年がはじめて知った異界への怖れだ。「風の又三郎」のなかで笹長根の谷に迷い込もうと

して無事に戻ってきた嘉助に一郎の兄が言う。「危いが
つた。危いがつた。向こうさ降りたら馬も人も其れつ
切りだつたぞ」。谷は異界への通路なのだ。異界への通

路は大地にぼつかりと口を開けていただけではない。
空にも又それは口をあけていたのである。「おれはあし
たに戦死するのだ」とつぶやきながら「鴉の北斗七星」
で大尉が見たものは次のような不気味な空の穴であつ
た。「どうとう薄い鋼の空にビチリとひびがはいつて真

つ二つに開きそのさけ目から、あやしい長い腕がたくさん
ぶら下がって鴉を掴んで空の天井の向こう側へ持
つていこうとします。」天の穴から突き出した長い腕の
なんという不気味さ。そんな水彩画が賢治に「あつた
とおもう。「僕たちしつかり」「やろうねえ」と呼びかけ
るジョバンニにむかってカンパネルラが指示示したもの
のは天の川の一とこに黒々と口を開いた「石炭袋」であ
つた。賢治の「谷」には異界への怖れが付きまとう。
賢治を常に畏れさせた底なしの谷とは何であったのか。

芭蕉のかるみ以後（35）

光成高志

天和三年五月に基角、芝金地院前の寓居に於いて「虚

栗」二巻を選了す。基角の自序

嘆「古人貧交行之詩」吐而戲序

翻「手作レ雲覆レ手雨。紛々俳句何須レ数。世不レ見宗鑑

貧交。此道今人棄如レ土

夙よ世に拾はれぬみなし栗

晋基角敬

この時基角は二十三歳、返り点を頼りに読み下して
みると、古人貧交行の詩を噛みて吐いて戯れに序す。
手を翻せば雲と作り手を覆くがえせば雨となる。紛々
たる俳句何ぞ数ふるを須ぢいん。世見ずや宗鑑が貧時
の交わりを。此道今人棄すて土の如し、である。夙
よ見てくれ世に拾われぬ虚栗というものがあるよ、俳
句だつて同じだよ、と木枯しに呼び掛けているのだ。
よく読むと、古人というのは杜甫である。杜甫の「貧
交行」の七言古詩をそのまま用いて、「紛々俳句」の元
は「紛々軽薄」であるし、「世不レ見」の元は「君不レ
見」であるし、「宗鑑貧交」の元は「管鮑貧交」である。
管鮑とは管鮑の交わりの管仲、鮑はその親友の鮑叔ぼう
しゆくである。手の平を上にむければ雲となり、下に向
ければ雨となる。このようにくるくると変わる俳句は
数え立てて問題にするまでもない。世の人よ、見た
まえ、宗鑑の貧しい時の交わりを。この交わりの道を
今的人は泥のように捨ててているではないか。これが基
角の序文である。これに対する芭蕉の跋文がこれ以上
に氣概に満ちてゐるのであるが、それは基角との両吟
を見てから熟読しよう。

この虚栗は上下二巻から成る発句四一八句、歌仙九

卷、他に三ツ物、二十五句連句などを収めた撰集である。作者は実に一一七名に上る。許六の俳諧問答によれば、「先師変風におけるも、みなし栗生じて次韻かれ、冬の日出でみなし栗落ち、冬の日はさるみのにおほはれ、さるみのは炭俵に破られたり」と書かれており、この順に読んでいけば正風の確立が辿れるはずである。冬の日は翌年の貞享元年になつたのであるから、蕉風確立をわずか一年後に控えてその方向付けをしたとも云える撰集であつた。芭蕉の発句は十四句、一座した歌仙は二巻である。その内「詩あきんど」の巻は基角との二吟であり、一人の呼吸が読みとれるので「芭蕉連句鑑賞(高藤武馬)筑摩書房S46年」を頼りに読み解いてみたい。

さみせん
三線。人の鬼を泣しむ
ナカ
ねむ

月は袖かうろぎ眠る膝のうへに
ねむ

じき
鴟の羽しばる夜深き也
ねむ

恥しらぬ僧を笑ふか草薄
ねむ

からかさ
しぐれ山崎傘を舞
まふ

そめ
笛竹のどてらを藍に染なして
そめ

こふ
狩場の雲に若殿恋
こふ

カ
一の姫里の庄家に養はれ
いふ

セメ
軒名にたつと云題を責けり
レウ

うらみ
ほとゝぎす怨の靈と啼かへり
なき

なづ
うき世に泥む寒食の瘦
かんじき

ホコにぶ
えびす
千鈍き夷に閑をゆるすらん

全

芭蕉

基角

詩あきんど年を貪ル酒債哉
サカタニ

とう
冬湖日暮て駕レ馬鯉
ノスル
ニ

人生七十古来稀
クニリ
酒債尋常往廻有

人生七十古来稀

ひん
沓は花貧重し笠はさん俵

蕉

角

蕉

角

蕉

角

蕉

角

蕉

角

全

芭蕉あるじの蝶丁見よ

腐クサれたる俳諧犬もくらはずや

鰥々として寐ぬ夜ねぬ月

婿入の近づくまゝに初砧

たゞかひやんで葛うらみなし

嘲アザケリニ黄金ハ鑄ルニ小紫ヲ

黒鯛くろしおとく女めが乳

枯藻髮モ采螺さくえの角つのを卷折まきらん

魔神まくじんを使トス荒海あらうみの埼

鉄くろがねの弓取猛タケき世いだに出よ

虎懷フトコロに姪ヤドるあかつき

山寒く四睡しそのの床とこをふくあらし

うづみ火消きえて指ともしびの灯

下司ゲス后さきあした朝あやをねたみ月とよを閉

西瓜アガを綾あやに包ムあやにく

哀あはれいかに宮城野のぼた吹凋シホるらん

みちのくの夷エゾしらぬ石臼

武士ものごぶの鎧よろいの丸麻まくらかす

八声ヤシナの駒つけの雪ゆきを告つげ

詩サカナチあきんど花ハナを食ル酒債哉

春湖シユンコ日暮ノルて駕ツレ興吟

芭蕉

全 角 蕉 角 蕉 角 蕙 角 全 角

この詩あきんどの巻は虚栗の巻末に置かれている両吟である。いきなりこの巻を鑑賞するのは群盲象を評すかも知れない。健二さんから拝借の飯島耕一著の『虚栗』の時代では、基角・西鶴と共にスピードある文章で書かれてある。

お便り広場（到着順、敬称略）

先日はお心のこもつたお品頂戴致し有難うございました。本日御主人様まだ入院と思いお電話致しました所思いがけなくお元気なお声にびっくり致しました。無事御退院おめでとうございます。なかくおうかどいできのでお見舞いとして私の心ばかりを同封させて戴きます。これは御礼をかねての私の気持ですのとれぐもお心遣いなされませぬ様重ねぐお願い申し上げます。どうぞ御主人様くれぐも御大事になされます様句会にてお会い出来るのを楽しみに致しております。

氣候不順の折からお身体お大切に まづは御礼お見舞いまで。

(4.10 多美子)

先の治療巧くいってよかつたですね。快吟のご様子なによります。四月号拝読しました。賑やか和やかな句会の様子が目に浮かびます。吟行仲間や万世遊さんの月例出句も殖え誌面益々充実、俳趣上昇の機運濃厚です。さて、小生、連休入りを前に石段から“つんのめり落ち”（胃切除の後遺症・ダイビング症候群の一つ“めまい”による）左膝の皿と同肋を骨折、全治2～3ヵ月の診断をうけ、目下ベッドと松葉杖頼りの生活を余儀なくされています。ために五月の吟行は甚だ残念乍ら参加できません。6月まで例会出席も無理と思います。とは言え、体調全般は頗る快、食欲も旺盛、心配はありません。その間出句はさせて頂きます。病より転び

が怖いなどと唱えながら面目ありません。印刷製本の喜怒哀楽社依頼賛成です。今後も是非そろして下さい。皆さんに何卒よろしくお伝えください。新緑眩い季節、ご自愛の上、ご快吟の程を祈り上げます。お礼かたがたお知らせまで。

白金葭ご恵送恐縮です。俳句より距離ができるてしまい、四苦八苦指折り数えています。新聞雑誌には目がゆき言葉のもつ多彩なことに感じ入るばかり復調したく存じますが。

墨堤に「花」唱和して春うらら 比呂子 (3. 寛子)

「白金葭」四月号拝掌、新出発おめでとうございます。頑張られんことを願つております。先月は昨秋見残したところが有るので出雲に行って来ました。余り休まないようにして九時間掛かりました。八十五歳になり衰えを感じるようになりました。今年の末頃富士に住んだ集成として「富士山百句」を新書版で出します。お元気で。

宿りしは出雲の阿国著我の花 (4. ひろし)

(ドライブ九時間はひろし先生ならではと思いますが、お大事になさって下さい。富士百句は買います。中山湖畔の富安風生の庵に富士山の句がチラシがありました。誓子先生でも百句はなかつたと思います。)

GW最終日鯉のぼりもくたびれて來た子供の日です。

ふだんと同じ日を送り白金葭四月号を拝受より日も立ちました。精力的に吟行を催され、編集やら何やらよくなさいますね。七十四号で「穴まどひ」中の拙句、世にお出し下さいまして恐縮いたしております。俳句を老いの生き甲斐とおっしゃる方が多い中、年々発想もときめきも貧困の一途を辿り困ったものですが、俳句は自分のものであるとの誰方かさんの言を頼りに下手をごまかしている今日この頃となりました。若者の廻りに居ないくらいで造語の意味不明に戸惑つております、せめて古い、言葉を使ってと意識せずとも大正昭和平成を生きつゝある自分なりの言葉使いになるのでしようか。先師は関西人で、結社の俳人達も関西人なので言葉でも受け取り方が違いました。私が「いぢる」としたら、いやな感じと云われ、先方さんが「いらふ」としたら私は感じが悪いと思いました。言葉については、いろいろ思うことあり長くなりますが、失礼いたしました。高志様の手術成功とありましたがあ、ステント手術のことでしょうか。何はともあれ一安心、おめでとうございます。 5月五日

光成高志様

P S 小山様のご入院加療とは気がかりで山尾さんにも聞いておりますが？（上？は私信を入れておきます高志）高志さんみちさん元気にしていますか。ハガキの件

は田宮さんは何も言つていなかつたので、聞かなかつたことにします。九品仏はお祭りは行つてみたかつたけど、小学校の先生につれて行つて貰つた。大きな足の彫り物見ましたか？お釈迦さまの足の裏です。

子供の日猫らはどこへ昼寝しに
前にメールしたのは届いていますか。我孫子もいろいろ事件が多いですね。きをつけてね。たまには手賀沼？も観てみたいきもする。
(5.7 彌栄子)

(6.17) 前略 木下で船に乗るよ。四の五の言わずに出て。(5.7 彌栄子)

九品仏吟行ではとてもお世話になりました。自分の句は剿滅的敗北だったけど、色々と出会つた諸兄姉氏の句の巧みさ、軽妙さ、深さ、鋭さに導かれつつ味わっているうちに、没落の憂さを忘れ果てました。なにしろ淨真寺にも練供養にも皆目無知だったものだから、一層初体験の刺激と好奇心が手伝つて、皆さんのが句に感動したのでしょうか。少々ばかりは口惜しくもあるから、菩薩本尊は歩みづらげな来迎会」練供養アウトサイダー閻魔さま」なんて作つてみたけど、いよいよ愚作を積むばかり。改めてたかしさんとみちさんのお骨折りへのお札を兼ねながら、感銘の次第を一筆しました。忽々。
(5.9 幸二)

前略 白金葭の投句原稿を送ります。今回は半年分(四月～九月)の会費を同封いたします。ご査収のほどお願い致します。
草々 (5.15 興正)

GWも終わり若葉の季節になりました。その後お身

体の具合はどうですか？忙しく高い目標に向かってが

んばっているのですと 思いますが、身体だけは無理を

せず気をつけて下さい。五月初めにうれしい事があり

ました。和彦の会社の友達だつた人がお供えを送つて

下さいました。病気で退職後もずっと五月の連休と忘

年会には声をかけていただき参加していました。五月

にはアウトドアだつたり車で遠出だつたり毎年の行事

のようでしたから。僕は一生の友達だと思つていたと

年会には声をかけていただき参加していました。五月

には声をかけていただき参加していました。本人はしんど

いようでしたから。僕は一生の友達だと思つていたと

年会には声をかけていただき参加していました。本人はしんど

いようでしたから。僕は一生の友達だと思つていたと

年会には声をかけていただき参加していました。本人はしんど

いようでしたから。僕は一生の友達だと思つていたと

年

5月
幸子

敏子さんもお身体に気をつけて下さいませ。

若葉日

毎に眩くお一人いよくご健吟のことと存じ

ます。小生、お蔭で回復極めて順調です。白金葭四月

号誌面充実先が頗る楽しみです。遅ればせ五月出句を

次のとおりお届けいたします。(中略)お手数かけます

が何卒よろしくお願ひいたします。編集作業無理され

ずゆつたり行きましょう。お体を大切にご清吟下さい。

4.17
孝三

毎週大兄と同席している源氏物語講義は、講師の綿

密な解説によつて、さながら王朝当時に立ち会つてい

るような気がして満足しています。(中略)教室内と帰

りの電車で大兄と交わす古典談義もまた私にとつて大き

な愉楽で、和やかに耳果報に浸れて有り難いです。大

ただ遺憾なのは私自身が寄る年波で記憶力が怪しくな

ついて、自らの発言で目を白黒させる羽目に屢々陥

ることです。昨日も諏訪湖をめぐる会話をしていて、

諏訪の住民だつた島木赤彦の隨筆に感銘した記憶を思

い出すまま語り筆者を同じアララギ派の伊藤左千夫に

取り違えて口にして、大兄にやんわり疑義を呈された

のでした。しかも最後まで赤彦の名が思い出せないの

ですから悲しい。本で読んだことは今や古びた私の脳

細胞の表層を滑落するだけでどんどん忘却してゆくに

過ぎませんが、読書三昧の日々は何物にも替え難いで

す。顧みると私の世代は教養主義の花盛りを生きてき

たのでした。おそらく私たちの次の団塊の世代が、大

正以来の教養主義の最終ランナーになることでしょう。

今この若者の本離れ活字離れにはただただ呆れるばかり

です。唐木順三の「現代史の試み」が出たのが昭和三

十八年、最近再読して白権派や小林秀雄批判と教養主

義総括の舌鋒の鋭さに驚かされた。昭和三十八年は私が大学を出て就職した年で戦後の教養主義全盛の時代。その頃に放たれた唐木さんの教養主義批判には私自身はまったく無知で実存思想や教養主義どっぷりの世界に浸かっていたのでした。最近、竹内洋「教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化」という本が、私は未読ですが評判になっています。唐木さんの教養主義総括から半世紀後の今になつて、教養主義の没落が論じられるのを見ると感無量です。唐木さんの南林間の自宅へは何度か訪れたこともあります。葬式には山本健吉さんと行つたほど身近な人だつたのに、その存在の大きさと思想に無縁で、学ぶことなく過ぎてきただが今は悔やまれます。救いはその全集を全巻蔵書で持つてゐること。「中世の文学」や「あずまみちのく」「無常」などをこれから精読するつもりです。和辻哲郎「日本精神史研究」を読んでいたら、枕草子の明快さを賞め源氏物語の悪文なることを書いて鷗外も同趣旨を言つてゐるとあり、いつたい鷗外はどんな風に言つたのか気になつていきました。与謝野晶子訳源氏物語刊行の折、「新訳初版の序」を鷗外が寄せてその中で源氏物語の現代語訳の必要性をその文章の難解さから説き、香川景樹門下の歌人松波資之が「源氏物語は悪文だ」と言つたことを記しているのを最近知りました。松波は

もともと皮肉屋で有名だから真正直に聞いて源氏物語を説くものと解すべきでない」とし、ただ源氏物語の用語の新古は別にして読みやすい文章でないことは確かだと言っています。鷗外にして然りとすれば、無教養極まる私などどうなるでしょう。しかし原文のもつ典雅さを味わいつつ王朝人の心に触れる事のできる（それが独断的錯覚としても）毎週の源氏物語講義ははじつに有り難いとつくづく思ったことでした。^(5.19 健二)

お元気ですか!! 今ナナは新しいクラス、先生、友だちと楽しく勉強しています!。三年生から四年生に進級して4年2組です。3年生のときは2階だつたけど、4年になつて3階になつたので毎日階段をのぼるのがすごく楽しく勉強ができます。じいじいとばあばは、このあたらしい1年間で思つたことや、こんな1年間にしたいと思ったことはありますか? ななは4年生の勉強はこんなにむずかしいんだあと思いました。今年はバアバ、じいじ、パパマリキみんながえがおで楽しくすごせる1年がいいなあ。ピアノの発表会では指がすぐつかれるくらい速くてむずかしい曲をちようせんしました。たくさん練習して、いつか聞かせてあげるね[❀]いつもおちついて体に気をつけて楽しくえがおですごしてね!

我孫子日記

4/21	例会
4/22	林望の講演
4/25	
*	北総病院
4/26	
SOA	
4/27	松戸
4/28	
*	淨真寺
5/5	練供養吟行
5/9	
*	北総病院
5/10	
SOA	
5/14	
*	能面朗誦
5/17	
SOA	
5/19	例会

*梨棚の梨の花咲く白一面
*2 九品仏の総門潜る松の芯

般舟場の扁額掛けて若楓

草刈機等はほうき淨真寺

八重桜来迎橋をあかくして

*3 觸るるまで駅舎の窓に桐の花

菱の葉の菱形その集まりも

*4 朴の花鑄びたる花の上にあり

敦盛の能面掛る若葉風

編集後記

今日日洋展への招待状が来た。ななの手紙も来た。私が4年生の時こんな手紙が書けたらよかつたのにそとの相手がいなかつた。あれから65年が経つてゐるわけだ。子供は子供と思つてはいけない。全部わかつてい

るのだ。子供だと思つて手加減してはいけない、正宗白鳥論で小林秀雄が講演している通りだ。扱、練供養吟行録を敬司さんに書いてもらいました。別紙ではなく、これからは本誌に掲載することにします。次回は6月16日17日と二一日の句会＆吟行となります。どうか体調と相談してご参加下さい。私の犬散歩道界隈です。多美子さん紀子さんお住いの隣町です。近江の水郷のような観光地ではあります。お見舞いなどのお言葉感謝しております。お便り広場でのお見舞いなどのお言葉感謝しております。にいつも舌足らずにて失礼しております。

高志 リ リ みち リ リ 高志 リ リ みち

白金霞四月号（通巻第七五号）平成二九年五月二三日発行

編集・発行人 光成高志

発行所 二七〇・一二一九 我孫子市南新木二一四一七

印 刷 所 ○四一七一八七一〇六八

○ fax ○四一七一八七一〇六八

印刷所 (株) ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房

〒九五〇・〇八〇一 新潟市東区津島屋七・二九

○二五(二五〇) 九六六六

表紙の題字・加納綾女 写真・五月二二日の白金霞